

子ども教育通信

先輩に聞こう！“ホームカミングデー”



ホーム
カミングデーに
参加しました！

働くことが、
楽しみになりました。

子ども教育学科4年

石橋早織 | 福井商業高校出身 |

国によって考え方や保護者への対応が異なる様子など、実際に働いている先輩の声が聞けて、とても勉強になりました。印象に残ったのは、「大変なこともあるけれど、現場だからこそ、子どもが成長する喜びがある」という言葉。働くことが楽しみになりました。貴重なお話を聞く機会ありがとうございました。

つながりを
大切にしていく場所。

平成24年度卒業
偕生慈童苑（生活指導員）

長谷川翔大 | 大野高校出身 |

学生の頃は、こちらから先生に質問するばかりでしたが、今回「そちらはどう？」と先生から尋ねられ、なんだか嬉しかったです。また、いろんな職場に勤める同級生と話ができ、いろんな視点や考え方方に再び出逢えて勇気をもらいました。つながりを大切していくためにも、ホームカミングデーはありがたい場所です。

卒業生が母校と仲間を大切に思
う気持ちを大切にして、ホームカ
ミングデーの新たな形態を工夫し
ながら、卒業生が足を運びやすい
場所づくりを進めていきます。

卒業生を支え続けるために。
気軽に足を運べる場所づくり。

少しでも卒業生のためになるこ
とをしていきたい——。卒業生の
支援を目的として、大学祭期間中
に開催された、子ども教育学科初
のホームカミングデー。約20人の
卒業生（第一期生）と3月に退職し
た教員の方々が久しぶりに大学を
訪れ、在学生および教員とともに
同じテーブルを囲みました。

和やかな雰囲気のもと、卒業生
がスピーチによる近況報告を実施。
学生の頃と違って、きりっと引き
締まつた話ぶりが印象的でした。
卒業生は先生に悩みを打ち明けた
り、在学生に対して助言をしたり
と、様々な交流が繰り広げられま
した。最後は「世界に一つだけの
花」を合唱してお開きとなりまし
たが、会が終わつた後も、会話は
尽きず、部屋の各所で集まって懇
談する姿も見られました。

卒業生が母校と仲間を大切に思
う気持ちを大切にして、ホームカ
ミングデーの新たな形態を工夫し
ながら、卒業生が足を運びやすい
場所づくりを進めています。



フィールドワーク 子どもが楽しめる空間を様々なテーマで制作。大学祭では、大勢の家族連れの来場者がありました。10月26日(土)・27日(日)



●ラストシンデレラ



●わくわくどっきり★はかせのへや



●おまつりわっしょい！



●すいすいすいぞくかん



●リトルマーメイドの世界へようこそ



●忍忍シュリケンジャー

先輩に聞こう！“保育所実習”



保育所実習へ行ってきました！

3年生27名が県内26ヶ所へ。
より発展的な実習を体験。

実習でしか
わからない
ことが、
たくさんある。



平成24年度卒業
永平寺町松岡西幼稚園
鈴木紋佳 | 羽水高校出身 |

実習では5歳児クラスを担当。ちょうどその時、ハーモニカの発表会を間近に控えており、一人の男の子が「できない」とあきらめていたのですが、一緒に頑張ってできるようになりました。短期間ながら、子どもの成長に触れて、保育士への想いが強まりました。また、実際に就職した時、最初からスムーズに仕事に入れたのは実習のおかげだと思っています。

社会との接点となる実習。保育の現実の厳しさに直面しながらも、現場だからこそ触れられる本物の魅力を体験することで、自らが価値を置くポイントを認識することがで

きます。

たせながら自分の想いと共にまとめていきます。これにより、実習を細かく振り返り、客観性を持った形で自分の想いと共にまとめることがで

ります。

間、子ども教育学科の3年生27名が県内26ヶ所の保育所において、保育所実習を実施。選択科目でありながらも、多くの学生が発的に参加しました。今回は、2年生に続く2回目の実習となるため、前回と比較してより発展的な内容が求められました。

指導計画案に基づいた実際の保育を開催する他、実習の中で課題も与えます。それが「エピソード記述」です。実習中、印象に残った場面を切り取り、自分なりの考察を加えながらまとめていきます。これにより、実習を細かく振り返り、客観性を持った形で自分の想いと共にまとめることがで

11月5日から18日までの2週間

『希望をつむぎだす幼児教育』(あいり出版 2013年) 編著者 子ども教育学科教授 石川昭義

本書は「現場と結ぶ教職シリーズ」の一冊として、幼児教育の分野について教職に必要な基本的な情報をまとめたものです。タイトルの「つむぎだす」には、子どもと大人の関わりによって「希望」を獲得する意味を込めました。私は、第1章「幼児教育の意義」を執筆しました。ここでは、芥川龍之介の『河童』を引用しました。それは、子どもの誕生に大人が自ら責任を負いながら、未来の社会の担い手として子どもを育てるというこの意味を問いかけたかったからです。本書の第2部では、これまで幼児教育の分野ではあまり取り上げられなかった経済、宗教、ジェンダーなど5つのテーマを取り上げました。いろいろな角度から、今後の幼児教育論の可能性を探っていくほしいと思います。

